



1. 行基式〈日本図〉とは何か

現存する行基式日本図がなぜ「行基菩薩御作」とかならずしるされているのか、それを作図したのは本当に行基なのか。

中世の文学資料『溪嵐拾葉集（けいらんしゅうようしゅう）』から、中世期には『行基菩薩記』というものが出回っていたことが推測され、行基菩薩の日本遍歴と田畠の開墾、そこから導き出された日本図が独鈷の形をしていたと記されていたことなどがわかる。

ここから、日本は独鈷の形であるという聖化の物語が生まれ、天のぬ矛や伊勢神宮の心の御柱も独鈷の形であり、さまざまなシンボリズムが同化されていった。

2. 金沢文庫本〈日本図〉と蒙古襲来

当時の日本図が「蒙古襲来」を背景に生まれたことを説く。

独鈷のかたちをなす日本そのものだけでなく、その周囲をとり囲む世界への興味と記述がおこなわれるようになった。意識のひろがりを、蒙古の襲来が促したのだ。

金沢文庫本で日本の周辺国の説明として添えられていた文章は、おそらく写図されたおりの間違い、あるいは既に元の図像に記載されていた文字自体が判読不能になっていた可能性もあり、単独では意味をとることができなかった。が、妙本寺本の発見により、本来の文章の意味が推測できるようになった。ここから、同様の日本図が当時広まっていたことが窺える。

3. 龍体の神々と国土守護

日本の神々はいわゆる中国の龍とも、大蛇ともいえる姿をとることが多かった。日本図を囲む帯状のものは、おそらく龍体の神を描いたものと推測できる。

蒙古襲来のおり、戦ったのは兵士たちだけではなく、神々も、龍体をあらわして戦ったのだ。

4. 龍が棲む日本

そもそも水神として信仰されてきたものが、陰陽道や仏教の影響を受けて変容していった龍神は、日本のいたるところに存在した。

霊験のある神社であればどこにでもある龍穴と呼ばれる洞窟は、国土の地下で繋がっており、そればかりか地下世界ははるか天竺までつながっていた。龍は河川や湖、沼にも棲んでいた。



5. 大龍と地震と要石

地震にはいくつかの種類があると分類されており、かつて、地震を起こすものは龍でもあった。龍はやがて鯰にとってかわられるわけだが、中世においては、未だ龍が地下世界を支配し、地震の力をも象徴していた。

金沢文庫本の〈日本図〉で失われた半分、龍の頭や尾が描かれるべき部分の本来の姿は、同じ系統の日本図と思われる「大日本国地震之図」から推測される。

龍は自身の尾を噛み、またその龍を「要石」が押さえているのである。「要石」とは、地震のときも揺らぐことはなく、抜けることもないと伝えられるものである。

この「要石」もまた、中世日本のメタファーでは独鈷であり、日本国自体も独鈷、かつて神々が国生みをなした御柱も独鈷である。それらは皆中心軸であるが、同時に、国土をしっかりと繋ぎとめておくべき柱でもあった。龍が日本をとり巻いているのは、それを守護するためである。

鹿島の要石もそうした中心軸の一つであり、〈国土〉が漂いださないように繋ぎとめ、あるいは〈国土〉が地震で揺れないようにと押さえる、はるか地底深く金輪際にも届いている長大な石として表象されていたのであった。それはおそらく十三世紀に生み出され、鹿島動石ないし石の御座などと呼ばれていた。それが室町時代を通じて要石といわれるようになっていったのである。

金沢文庫本は、独鈷の〈かたち〉をした聖なる〈国土〉と、それを守護する龍体の神々の姿を描いた希有な〈日本図〉であったのだ。円環をなしている大龍は〈日本〉の〈国土〉を守護する神々の姿であり、それゆえ〈国土〉を囲繞しているのである。中世人が〈日本〉は「神国」であるとするとき、そこにイメージされているのは、このような〈日本図〉であったのである。

エピソード 龍から大鯨へ

行基式〈日本図〉を読み込んでゆくことで〈国土〉の歴史を考え、中世〈日本〉の〈大地〉に棲む龍の姿を浮かび上がらせるという本書の試みは、かくして終わった。その要点を簡単にまとめておくことにしよう。

独鈷の〈かたち〉をした行基式〈日本図〉

行基式〈日本図〉の原型は、おそらく平安時代には作られていた。それが「行基菩薩御作」とされるようになったのは、平安末期から鎌倉初期の頃のことであろう。『溪嵐拾葉集』に引かれていた『行基菩薩記』はその頃の成立と思われるテキストだが、それによると行基は〈国土〉を経回って新田開発と国の境界設定を行ない、その後で〈日本図〉を描いてみた。すると、そこに現れた〈国土〉は密教法具の独鈷の〈かたち〉をしていたのである。この物語によって〈日本図〉は「行基菩薩御作」とされるようになり、〈日本〉の〈国土〉は独鈷の〈かたち〉をしてい

るとして、聖化されたのであった。これが、いわゆる行基図つまり行基式(日本図)の成立である。

独鈷は、(日本)の(かたち)であるだけでなく、天瓊矛や伊勢神宮の心の御柱なども独鈷の(かたち)をしていた。(国土)の下の海底にあるとされた聖なるしるし大日の印文も独鈷であった。こうして聖なる棒状・杭状のものはすべて独鈷であるとすると、中世宗教思想特有のメタファー的な思考が働き、中世(日本図)だけでなく、日本を独鈷とし、震旦を三鈷、天竺を五鈷として表象・イメージするシンボリックな三国世界観念が生み出されていったのである。

蒙古襲来と「三韓征伐」

蒙古襲来の危機は、そうした行基式(日本図)に新たな、そして大きな変化をもたらした。すなわち、この時期に製作された行基図は、(日本)の周囲の世界を描くようになったからである。それは(日本)を中心とした一種の東アジア世界図としても図化されるようになったことを意味し、そこに「蒙古国」も位置づけられたのであった。

現存最古の行基図の一つである金沢文庫本(日本図)の場合、東西に横たわる伝統的な(日本)(国土)を中心に、南-北軸には想像上の地である「羅刹国」と「雁道」が書き込まれた。

そして西方には「唐土」「高麗」「蒙古国」、西南には「龍及国字嶋(琉球国大島)」「雨見嶋(奄美島)」が描かれていた。しかし、北の「雁道」の脇にはなぜか「新羅国 五百六十六ヶ国」という不思議な記載があるし、「蒙古国」に関する記載もよく意味が通らず、解釈を保留しなければならぬものであった。

その謎を解ききつかけを与えてくれたのが、妙本寺本(日本図)の発見である。妙本寺本は、「博多」の存在を強調しており、おそらくは九州の(かたち)をした(日本)を描き、そこに「日本国六十六ヶ国」と書き込んでいる。その周囲の島々として「対馬」「老岐」「五嶋」「コシキ(甌嶋)」「イワウ(硫黄嶋)」が描かれ、さらには「エス(蝦夷)ノ千嶋」「鬼海嶋」「タムロサム(耽羅島)」「済州島」「琉球国 身八人頭ハ鳥」が書き込まれていた。

さらに扇状に大陸が描かれ、「高麗ヨリハ蒙古国ト云、日本ヨリハ刀伊国ト云、唐土ヨリハ多漚国ト云 一千八百ヶ国ナリ」とあることによって、金沢文庫本の「蒙古国」云々の意味するところが明瞭になり、「両図ともに蒙古襲来による危機意識が生み出したものであることがわかったのであった。

しかも、扇状の大陸には「高麗国 七百六十六ヶ国」「新羅国 五百六十六ヶ国」「百済国 四百六十六ヶ国」とあって、古代の、いわゆる「三韓」が記載されていた。このことから、蒙古

襲来の危機に際して製作された〈日本図〉は、神功皇后の「三韓征伐」の神話が世界認識の枠組みをなす敷きとされていたことがわかったのである。
金沢文庫本と妙本寺本の両〈日本図〉はともに写図であるから、十三世紀後半には間違いなく、このような〈日本図〉が数多く作製されていたと推定できる。今後、さらに発見される可能性もあるだろう。

龍が棲む〈日本〉の〈国土〉

では、金沢文庫本の〈日本〉を冊繞さいにょうしている巨大な動物は何かといえば、それは龍であった。〈日本〉の龍は、在来の蛇に陰陽道おんやうどうと仏教の龍が複雑に絡み合って成長したものであり、平安時代には水神として定着していった。中世の人々は、龍・龍王・龍神に降雨・止雨を祈ったのである。

しかし、それだけが〈日本〉の龍の姿・イメージではなかった。龍は、神々が〈日本〉の〈国土〉を守るために戦う姿である。諏訪大明神は、蒙古襲来でも、東夷の蜂起に際しても、大龍の姿を現して戦ったとされる。すなわち、異国の侵略などに対して、自ら立ち向かって〈国土〉を守護し、あるいは天変地異を起こす神々の姿は龍だったのである。

また龍は、大地を震動・鳴動させる存在であったし、火山の噴煙とともに出現することもあった。そして龍の出現は、政変などの予兆でもあった。龍の姿をした神々は、その怒りによって地震を起こし、火山を燃やした。龍は地震と深く関わっており、中世の人々は、「大智度論だいぢどろん」などに依拠した陰陽道の地震占いによって、地震の吉凶を判断した。中世の地震には「龍動・龍王動・龍神動」「火神動」「水神動」「天王動・帝釈動」「金翅鳥動こんじちようどう」の五種があり、起こった地震がどの地震であるか、その吉凶・意味するところが占われたのである。

中世〈日本〉の龍は、〈国土〉の随処に棲んでいた。例えば伊豆の走湯権現では、日金山の地下に伏龍がおり、その両眼や鼻口などから温泉を噴き出しているのである。

こうして龍が棲んでいた中世〈日本〉の〈国土〉には、「龍穴」「人穴」などと呼ばれる穴が無数に開いており、中世〈日本〉の〈国土〉は穴だらけであった。これらの穴は室生の龍穴をはじめとして、長谷寺・興福寺・吉野・葛城山・笠置山・熊野三山・彦山・比叡山・石山寺・祇園社・箕面・江ノ島と例示できるし、それ以外にも数多くの中世の龍穴が見つかっている。要するに、靈験のある寺社ならどこでも、龍穴ないしは八大龍王などの龍神を祀っている社があるといっても過言ではあるまい。

それらの龍穴の奥は互に通じあっており、地下世界には巨大な穴道が無数に走っていたの

である。弁財天が祀られているところには龍穴があり、そこから穴道が地下世界に延びていた。伊豆の走湯山の地下にも「八穴道」があり、各地の聖地を繋いでいたし、熱田社にも「九穴道」があり、〈国土〉の聖地だけでなく、遠く天竺の無熱池にまで繋がっているとされている。なんとも壮大な地下のコスモロジーである。

また、龍は、湖海や池沼、河川や滝にも棲んでいた。広い意味では、そこも〈大地〉である。瀬戸内海や琵琶湖にも、阿蘇の宝池や諏訪湖にも、宇治川や那智の滝などにも、あるいは奈良の猿沢の池などにも、龍は棲んでいとされてきた。

それらの龍穴や穴道、湖海や池や滝などに棲む龍は、いうまでもなく神々の化現であり、あるいは霊体であったのだ。

要石と龍

金沢文庫本〈日本図〉の東半分の失われた頭部と尻尾がどうなっているのかといえば、基本的には、金沢文庫本の系統である一六二四年(寛永元)の「大日本国地震之図」によって推測できる。龍が〈日本〉を取り巻いて自分の尾を噛んでおり、その龍の頭を「要石」で押さえられているのだと思われるのである。

中世〈日本〉のメタファー的思考によれば、要石も独鈷であり、日本紀の国生みの物語で、伊邪那岐命と伊邪那美命がめぐった国の柱も独鈷であり、〈日本〉の中央に立てられた中心軸であった。中世〈日本〉では、〈国土〉をしっかりと大地の奥底の金輪際に繋ぎとめておく柱・杭・石が中心軸であったのである。そうした中心軸は〈日本〉各地の聖地にあった。近江の国琵琶湖の竹生島は金輪際から生えている宝石の柱でできた島とイメージされていて、そうした中心軸の一つであった。常陸の国鹿島神宮の要石も本来は、〈国土〉を金輪際に繋ぎとめる石柱であった。そうした聖なる竹生島などを龍が圍繞しているのは、それらを守護するためであった。同様に、金沢文庫本の巨大な龍も、〈日本〉を取り巻いて守護しているのである。

有名な鹿島の要石(中世では「動石」「動杭」と呼ばれた)とは、そうした石の一つであり、それによって押さえられていたのは、本来は地震を起こす存在である龍そのものだったのである。

龍から大鯰へ

しかし、地震を起こすのは鯰ではなかったのか、そう読者は思われたことであろう。確かに、われわれの常識では地震を起こすのは大鯰である。近世つまり江戸時代のある時期から、龍は

大鯰へと変身していったのである。それはいつ頃のことなのか。最後にこのことに触れておくことにしよう。

ところで、V章の記述によって、読者は、すでに竹生島を囲繞している大鯰に気づいておられるであろう。

そうなのだ。中世の龍は大鯰でもあり、竹生島を取り巻いていたのであった。だから、地震を起こしたのは龍であったが、その龍が大鯰でもあることは、少なくとも竹生島をめぐる中世のシンボリズムでは問題なかった。つまり、龍が大鯰に変身する素地は、すでに中世において準備されていたのである。要するに龍は、中世から大鯰でもあった。だから、龍はいつでも大鯰に変身できたし、事実、近世のある時期から、地震を起こす存在はもっぱら大鯰とされていたのであった。

「いせこよみ」・大雑書

そこで、一六二四年(寛永元)の大日本国地震之図に描かれた龍が、その後どうなっていたのか、その図像の崩れと大鯰への変貌を追ってゆくことにしよう。

そのことについてまとまった考察を行なっているのは、古暦の研究者である岡田芳朗であっ

た(岡田、一九八二年など)。その研究成果に依拠しながら、以下の検討を試みたい。

ある年、岡田は、寛文十三年(一六七三)暦から貞享二年(一六八五)暦までの、十一一点の「いせこよみ」(図10)を入手した。それは、大日本国地震之図と同様に(日本)を龍が囲繞している(日本図)が表紙とされている仮名版暦であった。岡田は入手したものと既知の五点の合計十六点を検討して、大略、次のように結論している。

第一に、一六七三年から八五年までのほぼ毎年、「いせこよみ」は作られて頒布されている。版元の検討からはどうやら江戸で刊行されたもの(「江戸暦」と考えられ、その内容の検討によって、伊勢神宮が刊行していた「伊勢暦」の系統に属するものと判断できる)。

第二に、この暦の表紙に描かれている怪物は、一六二四年の大日本国地震之図、さらには鎌倉末期の金沢文庫本(日本図)にまで遡れるものであり、本来(日本)を取り巻く大魚ないし青龍であったものが、寛文(一六六一)〜七三年間をさほど遡らない頃に、鯰に変わったのであろうと考えられる。

そして第三に、一六八五年、江戸幕府の暦法改定に際して、このような絵を描いた暦は禁止された。すなわち、この改暦は幕府の暦統制と結びついていたから、「いせこよみ」は、それ以後作られなくなってしまったのである。しかし、鯰が(国土)を取り巻く(日本図)には根強い

人気があり、以後は大雑書とか三世相とか称される類の運勢を解説した書物に登場するようになったのである。

この三点の指摘は、おおむね妥当と思われる。さらに、岡田に頼んで送ってもらった十一点の「いせこよみ」の表紙のコピーを検討すると、次のような諸点が指摘できる。

この「いせこよみ」の〈日本図〉が、一六二四年の大日本国地震之図の系統をひくものであることは、構図・記載内容のいづれからも間違いない。目立つ違いとしては、大日本国地震之図にはない島がいくつか「いせこよみ」には見られる。例えば、左下(西北)に「をにがしま(鬼ヶ島)」、右側(南)に「はだかしま(裸島)」、右下(西南)に「くはうしま(?)」などである。

大日本国地震之図と同じく、六十六カ国とともに「かまくら」が記載されており、この系統の〈日本図〉がやはり中世に誕生していたことをうかがわせてくれる。また、諸国と並んで「ふじ山」が書かれているのは、東国に力点が置かれた〈日本図〉であることを物語っている。

十一点の「いせこよみ」の〈日本図〉と龍は、一六二四年の大日本国地震之図と比較するとかなり崩れており、龍は、それらしくなくなってしまっている。両者の間には一定の時間的経過が存在したと想定できるだろう。

つまり、大日本国地震之図に記されている「寛永元年(一六二四)」という刊記はいちおう信



図10 「いせこよみ」の表紙(延宝10年版、岡田芳朗氏提供)

頼してよいと思われる。そして「いせこよみ」は寛文十三年(一六七三)であるから、十七世紀後半には、龍のイメージはかなり失われてしまっているといえるだろう。大日本国地震之図に描かれた龍の姿は、十七世紀後半以降に崩れてゆき、その意義や意味も急速に忘れ去られていったのであった。

その同時期に、鯰は登場した。岡田が紹介している一六六五年(寛文五)刊の教訓書『塵滴問答』には「鹿島大明神、日本を巻く鯰に要打つ」とあり、小島瓔禮によれば、一七〇二年(元禄十五)刊の俳諧書『あかゑぼし』には「なまづが背負ふ日本国」とある(小島、一九九六年)。そのほかの文学史料によっても、龍から大鯰への変化が十七世紀

後半に進行し、十八世紀初頭には定着していったことを推定できる。

中世的〈国土〉観から近世的〈国土〉観へ

おそらくそれは、中世的な〈国土〉観が急速に廃れてしまったこととパラレルな現象であっただろう。そもそも、戦国から江戸初期にかけては、〈日本〉地図史上の巨大な画期であった。西欧の世界図・地球儀が伝わり、行基図を超えたさまざまな〈日本図〉が製作されるようになっていった。行基式〈日本図〉は、江戸幕府が作製した〈日本図〉をはじめとする近世〈日本図〉に、その席を譲っていったのである。その根底には、中世的〈国土〉・〈大地〉観から近世的なそれへの巨大な変動があったとみなければなるまい。

とすると、近世〈日本〉の〈国土〉・〈大地〉観とはどのようなものとして成立してきたのか。これが次なる問いとなる。しかし、それを解くためには、いったん本書を閉じて、次なる作業に立ち向かうための十分な時間が必要である。

主要参考文献

A 大地・自然論

大塚久雄『共同体の基礎理論』岩波書店、一九五五年(岩波現代文庫、二〇〇〇年)

B 地図史と行基式〈日本図〉

青山宏夫「雁道考―その日本図における意義を中心にして」『人文地理』四四巻五号、一九九二年

秋岡武次郎『日本地図史』河出書房、一九五五年

彌永貞三「『拾芥抄』及び『海東諸国紀』にあらわれた諸国の田積史料に関する覚え書―中村栄孝「海東諸国紀の撰修と印刷」の脚注として」『名古屋大学文学部研究論集』四一、一九六六年(『日本古代社会経済史研究』岩波書店、一九八〇年)

海野一隆『地図の文化史―世界と日本』八坂書房、一九九六年

海野一隆『地図に見る日本―倭国・ジパング・大日本』大修館書店、一九九九年

応地利明『絵地図の世界像』岩波新書、一九九六年

織田武雄「行基図の成立とその影響」海野一隆他編『日本古地図大成』講談社、一九七二年

織田武雄『古地図の博物誌』古今書院、一九九八年

黒田日出男「行基式〈日本図〉とはなにか」黒田日出男他編『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会、